序

会長　足利　惇氏

ここに西南アジア研究会の会誌第十号を世に送ることが出来たことは，会員の一人として大きな喜びである。とくに本巻は，多年アッシリア学，就中，シュメール学研究に尽瘁せられた中原与茂九郎教授の退官記念号として編纂せられ，幸い本邦における斯学者の論稿を網羅し得て一層光華あるものとなった。東京教育大学の杉勇教授からは御都合により寄稿を仰ぎ得なかったが，中央大学の板倉勝正教授の論稿はわれわれに学問的友情の深い感銘を与えた。今回の壮挙には中原教授みずからも進んで執筆せられ，同教授に親くし提撕を受けた小野山節，山本茂，吉川守三氏，新鋭の論文を併せ掲載することにより，ここに今日本邦における Studia Sumero-Assyriologica の精萃を内外に示し得たことは正に斯学の偉観と云っても大過ないであろう。さらに同教授に学問上親交久しき伊藤義教氏の賛助執筆を見たことは，本号をして名実ともに「古代オリエント研究特集」の名に値いしめる結果となった。

中原教授の学問的経歴については別項に述べられてあり，ここには繁を厭うて再言することを慎しむが，欧米に比して学問的に最も後進的分野である西南アジアの学問において，そのなかでも研究的条件のきわめて困難なシュメール学において，半世紀近くの間孜々として休まれることなく，しかも今後もますますその精進を続けられるという教授の孤高的意欲を聞くとき，われわれ後進のものは深く同教授の学問的情熱に打たれるであろう。アッシリア学の講座の開設は，わが国においては時運熟せず，同教授の在任中にその実現を見ることは出来なかったけれども，有能な学問的後継者の種子はすでにわが学園に蒔かれ発芽を見た。その育成は正にわれわれ学徒の義務であり，また同教授永年の学問的功績に報いる所以であることを確信して已まぬものである。